＊M0625H000YMACC12070900000472＊
２５日付　山城Ａ朝刊通し　◎Ｅ・新随想箱
２０２１年０６月２２日１６時２８分２１秒　ＩＤ＝ＣＣ１２０７０９０００００４７２
ＰＤＦゲラ出力　箱組　校正回数＝６６　７９倍　０×　２３行　０

随想やましろ

梅雨が長かった２年間

門阪　庄三

６月の雨は降り続く雨。やむことがないと思うほどの雨。だが出掛ける楽しみがあれば、雨でもさして気にならない、というものだ。

近年も、雨の中を友人と自転車で鴨川から淀川の川沿いに毛馬の水門まで走った。雨の日も他の日とあまり変わりない―今ではそう思う自分が、梅雨の時季を特別に長く感じた2年間がある。

私の生家は仏光寺通に面したうなぎの寝床の京都の町家で、私は軒を少し越えるくらいのモミジの木がある中庭の奥の、離れの2階に部屋をもらっていた。

そこから予備校に通った年は、梅雨が長かった。成績が芳しくなかったこともあり、予備校へ通うのもおっくうだった。訪れる友人もわずかで、多くの時間、部屋の窓から見るともなしに梅雨空を眺めたものだった。

庭をまたいだ母屋の瓦屋根を伝って落ちる雨、中庭の木々の葉を深い緑に変える雨を、長い間、見つめていたように思う。瓦に当たる雨音はいまも耳に残っている。７月の期末試験が終われば祇園祭だ、などと胸がときめく言葉を交わすこともない、寂しい季節だった。

そしてその翌年も長い梅雨だった。大学に入って間がないものだから、友人もいない。近所の食堂へ出掛ける以外、ほとんど毎晩、雨音とラジオを聞きながら過ごした。

ラジオは父が奮発して買ってくれた、単1電池が4個も入っているソニー製のものだった。野球中継を聞くのが目的だったが、雨天中止もたびたびで、そんなときラジオは長い時間、音楽を流してくれた。

野球中継も好きだったが、畳の上に寝転んで、音楽を聞きながら本を読む新しい習慣も悪くはなかった。そしてこの年も長い時間を1人で過ごすことになった。

毎年、梅雨が巡ってくるたびに、憂うつな季節と孤独の時間が重なった2年間の記憶が、なぜか鮮明によみがえる。

（かどさか内科クリニック）